

## 鳴門中將物語

いづれの年の春とかや、やよひの花盛りに花徳門の御つぼにて、二條前關白、大宮大納言、刑部卿三位、頭中將などまゐり給ひて、御鞠侍りしに、見物の人々にまじりて、女どもあまた侍るなかにうちの御心よせに思しめすありけり。鞠は御心にも入らせ給はで、かの女のかたを類に御覽すれば、女わづらはしげに思ひて、うちまぎれて左衛門の陣のかたへ出でにけり。六位をめして「この女の歸らむ所見おきて申し侍れ」とおほせたびければ、藏人おひつきて見るに、この女心えたりけるにや、いかにも此の男すかしやりてにげむと思ひて、藏人を招きよせてうちわらひ「くれた竹のと申させ給へ。あなかしこ。御返しをうけたまはらむ程は御門にて待ちまゐらせむ」といへば、すかすとは夢々思ひよらで、たゞすきあひまゐらせむとするぞと心えて、急ぎまゐりて此のよし奏し申せば、「定めて古歌の句にてぞ侍らむ」とて御尋ねありけるに、その庭には知りたる人なかりければ、爲家卿の許へ御尋ねありけるに、とりあへず、古き歌とて、

「高くとも何にかはせむくれた竹の一よ二よのあだの節をば」と申されたりければ、いよいよ心にくき事に思しめして、御返事なくして「たゞ女の歸らむ所をたしかに見て申せ」と仰せたびければ、立歸りありつる門を見るにかきけつやうにうせぬ。又まゐりてまかじかと

奏すれば御けしきあしくて、尋ね出さずばとがあるべきよしを仰せらる。藏人あをさめてまかりいでぬ。此のことによりりて、御鞆もことさめて入らせたまひぬ。その後にはがしがしくまめだゝせ給ひて、心ぐるしき御ことにぞ侍りけるに、或時、近衛殿、二條殿、花山院大納言、大宮大納言公相、中納言通成あどやうの人々参り給ひて御遊侍れども、さきざきのやうにもわたらせ給はず、物をのみおぼしめすさまにて、御ながめがちなれば、近衛殿御かはらけを進め申させ給ふついでに「まことにや、近頃行きがたまらぬ宿のかやり火にこがれさせおはしまし侍るなる。尋ね行き見む、かくれ侍るまじものを。もろこしには蓬萊まで尋ね侍りけるためしも侍るを、是は都のうちなれば、やすき程のことなり」とて御みさまをわらせ給ふに、内もすこしうちわらはせ給へどもそいろかせ給ひていらせ給ひぬ。その後藏人、いたらぬくまもなく、もしやあふともとめありきて、神佛に祈り申せどもかひなし。おもひ侘びて、文平と申す陰陽師こそ當世にはたなごゝろをさして推察まさしかなれ、此のことうらなはせむと思ひて、罷り向ひてとひ侍りければ、申しけるは、「これは内にも承り及べり。ゆゑしき大事なり。文平うらはこれにて心みはべるべし。火のえうをえたり。かみと神なり。今日は巳の日なり。巳はくちなは。此のことをするに、一旦のかくれなり。つひにはあはせ給ふべし。たゞし火のえうは夏の氣にいたりて御悦なり。くちなはなれば、もとのあなに入りてもとの所に出づべし。夏の中五月中にかくれけむ所にてかならずあはせ給ふべし」と申せども、これも凡夫なれば一定たのむべきにはあらねども、むげにうはの空なりしよりは、この

こゑを聞きて後は、つねに左衛門の陣のかたにぞたゝすみける。五月十三日最勝講の開白の  
 日この女ありしさまをあらためて、五人つれてふと行きあひぬ。藏人あまりの嬉しさに夢う  
 つゝともおぼえず。あやしまれじとおもひて、人にまぎれて見侍れば、仁壽殿の西のひさし  
 になみゐて聽聞す。御こゝははて、ひしめかむ時又うしなひていかゞせむと思ひて、經俊の  
 殿上ぐちにおはする所にて、「此のことまかじか奏し給へ」とかたらへば、「唯今中宮一所御  
 聽聞の程なり。こちなし」と申しければ、力及ばず。一位殿さい相のすけに申し、かば、我が  
 御局口にて女房と物おほせらるゝを見あひまゐらせて、畏みて申しけるは、「推參に侍れど  
 天氣にて侍り。まかじかのこと急ぎ奏し申し給へ」と申しければ、かねてきこえあることな  
 れば、やがて奏し申させ給ふに、女房して「神妙なり。かまへて此の度は不覺せで行く方をた  
 しかに見せおきて申せ」と仰せらるゝ程に、講はつれば夕暮になりぬ。この女どもひと車に  
 てかへるめり。藏人我が身はまたあやしまれじと思ひて、さかさかしき女をつけて見入れさ  
 すれば、三條白川になにがしの少將といふ人の家なり。このよしを奏すれば、やがて御文あ  
 り。

「仇にみし夢か現かくれ、竹のおきふしわぶる戀ぞくるしき。この暮にかならず」とばか  
 りあり。藏人御書を賜はりて、かの所にもて行くに、男ある人なれば、わづらはしうて歎く  
 に、御使は心もなく御返しをせむれば、いかにもかくれあらじと思ひてありのまゝにかたれ  
 ば、少將さすがにわづらはしげに思ひて「男の身にてさうなく參らせむにもはゞかりあり。

わなかまといさめむも、びんなかるべきことなり。人によりてこととなる世なれば、ひと  
 つは名聞なり。人のそしりさもあらばあれ、とくとくまわり給へ」とすむれば、うちなきで  
 かなふまじきよし返す返すいなび申せば、少將申しけるは、「この三とせが程おろかならず  
 思ひかはして過ぎぬるも、世々の契なるべし。今又めされ給ふも浅からぬ御契ならむかし。  
 やうやうしてまわり給はずば、定めてあしざまなることにてわが身も置き所なきことに  
 も成りぬべし。よもあしくは計らひ申さじ。とくとく参り給へ」とかへすがへす勸めければ、  
 女うち涙ぐみて、御ふみひろげて見るに、「此のくれにかならず」とある文字のまたに「を」と  
 いふもじをたゞ一つすみぐるに書きて、もとのやうにして御使にまゐらせけり。御文もとの  
 やうにてたがはぬを御覽じて、むなしく歸りたるよとはいなくおぼしめすに、結びめのまど  
 けなければ、わけて御覽するに、この「を」文字ありとて、御案あれども御心もめぐらせ給は  
 ず。さるべき女房達を少々めしてこの「を」もじを御尋ありければ、承明門院に小宰相の局と  
 て家隆卿のむすめのさぶらひけるが申しけるは、「むかし大二條殿のり、小式部の内侍のものと  
 へ、月といふもじをかきてつかはしたりければ、さるすきもの、泉式部がむすめなりければ、  
 母にや申しわはせたりけむ、やすく心えて、月の下にをといふ文字ばかりを書きてまゐらせ  
 たりける、其の心なるべし。月といふ文字はよざりに待ち侍るべし、出でたまへと心えけり。  
 又人のめし侍る御いらへに、男はよと申し、女はをと申すなり。されば小式部内侍も、上東門  
 院にさぶらひけるが、まかりいでまゐりたりければ、いよいよ心まさりしてめでおぼしめ

しける。これも一定まゐり侍りなむ」と申しければ、御心ちよげにおぼしめして、またまたせ給ひけり。夜もやうやうふけぬれど、よるのおとへもいらせ給はず、とのゐ申しのきこゆるは、うしになりぬるにやと御心をいたましむる程に藏人忍びやかに、此の女まゐり侍るよし奏し申しければ、嬉しうおぼしめされて、やがてめされにけり。漢武の李夫人にあひ、玄宗の楊貴妃をえたるためしも、これにはまさりはべらじと御心のうちもかたじけなく、さまざまかたらし給ふ程に、あけやすきみじか夜なれば、曉近く成りゆくに、此の女身の有様をかきくどき、こまかにはあらぬど、心にまかせぬことのさまを奏し申しければ、まづかへしつかはされにけり。御心ざしあさからず。やがて三千の列にもめしおかれて、九重の内のすみかをも御計らひあるべきにて侍りけるを、まめやかになげき申して、「さやうならば中々御なさけにても侍らじ。ふちせをのがれぬ身のたぐひにもなりぬべし。唯このまゝにて、人のいたくまらぬ程ならばたえずめしにもまたがふべき」よしを申しければ、つひにもとのすみかへかへされて時々忍びてめされけり。彼の少將は隠者なりけるを、あらぬかたにつけて召し出されてよろづに御情をかけられて、近習の人数に加へられなどして、程なく中將になされにけり。つゝむとすれどおのづからもれ聞えて、人の口のさがなさは、その頃のもてあつかひにて、「なるとの中將」と申しける。なるとのわかめとて、よきめののぼる所なれば、かゝる異名をつけたりけるとかや。およそ君と臣とは、水と魚とのごとし。上としてもおごりにくまず、下としてもそねみ亂るべからず。もろこしにも楚の莊王と申す君は、寵愛の後の衣

をひくものをゆるして情をかけ、唐の太宗と申すかしこき御門はすぐれておほしめしける  
后をも、臣下の約束ありとてくだしつかはされけり。我が朝にもかゝるふるきためしも、あ  
また聞え侍るにやあらむ。今の後さがの御門の御心もちるの御かたじけなさ、中將のゆるし  
申しけるなさげの色、いづれもまことに優にも、ありがたきためしにも申し傳ふべきものを  
や。君とし臣としては、なにごとにも隔つる心なくて、たがひになさげ深きをもとゝすべき  
にこそと昔より申し傳へたるも、ことわりに覺え侍りけり。

## 鳴門中將物語

終